

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 15 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520320

研究課題名(和文) アイルランドのナショナリズム：ヤング・アイルランドから復活祭蜂起を軸として

研究課題名(英文) Literary Nationalism in Ireland: from the Young Irelanders to the Easter Rising

研究代表者

三神 弘子 (Mikami, Hiroko)

早稲田大学・国際学術院・教授

研究者番号：20181860

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、19世紀中葉から20世紀初頭というアイルランド近現代史における激動の時代に焦点を絞り、アイルランドのナショナリズムを活性化させたヤング・アイルランド運動、1916年の復活祭蜂起などがどのように文学作品の中で表象されているか、詩、小説、演劇の分野から分析検討を行った。これらの成果は、8件の学術論文、6件の学会発表によって公開された。また、最終年度において、国際シンポジウムを開催し、成果を海外に発信するとともに、海外の研究者との知的交流を推進した。

研究成果の概要(英文)：This research focused on a turbulent period of modern Irish history from the mid-nineteenth century to the early twentieth century and examined how political and nationalistic movements such as the Young Irelanders' and the Easter Rising have been represented in poetry, novels, and plays. Eight academic papers both in Japanese and in English were published and 6 papers were also read at international as well as domestic conferences. In the final year, an international symposium was organized and a lively discussion was held.

研究分野：英語圏文学

キーワード：アイルランド文学 ナショナリズム ヤング・アイルランド 復活祭蜂起 ジョイス、ジェームズ イ
エイツ、W. B. ファーガソン、サミュエル マーフィー、トム

1. 研究開始当初の背景

本研究は、三神弘子(研究代表者)及川和夫(研究分担者)、清水重夫(研究分担者)の3名が数年にわたって準備を進めている『アイルランド歴史・文化事典』という企画と連動している。事典項目の執筆を進めるうちに、大局的な時代の文脈に、個々の文学者や文学作品、歴史的事件を位置づけ、総合的に、かつ相補的に捉えなおす必然性が生じてきた。こうした経緯から始められた本研究は、アイルランド史において、特に19世紀中葉から20世紀初頭に焦点を絞り、その間に進められたヤング・アイルランド運動、1916年の復活祭蜂起などがどのように文学作品の中で表象されているか、分析検討を進めたものである。このアイルランド近現代史における激動の時代に起こった政治的ナショナリズム運動は、文化運動、文学的言説に大きな影響を与えたが、逆にまた、そのような文化運動が国の政治的社会的方向性に大きな影響を与えたという点も、アイルランド特有の現象であると言える。

上記のアイルランドの激動の時代を扱った文学作品は、現代においてもさまざまな形で書かれ続けていることに加え、文学を歴史的な文脈においてとらえるという作業は、読み手が生きる<現代>という文脈と常に連動させて再考し続けなければならないという共通認識から、本研究は、19世紀中葉から現代までのおよそ150年にわたる期間をカバーした。

こうしたアイルランドにおけるナショナリズムと文学に関する諸問題は、既に充分研究し尽くされたテーマのように思われがちであるが、詩、小説、演劇といったジャンル別の研究、作家別の研究、時代を限定した研究を除くと、総合的な先行研究は意外に少ない。本研究は、従来、社会科学(歴史・政治研究)の分野と人文科学(文学・文化研究)の分野で別個に進められてきた「アイルランドのナショナリズムと文学」というテーマの統合を目指したものである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、19世紀半ばのヤング・アイルランド運動から20世紀初頭の復活祭蜂起までの期間を時代背景として、アイルランドが経験した激動の時代に、100年から150年を経た今日の視点で、アイルランドの散文、詩、演劇作品を読み直し、もう一度歴史的な文脈においてとらえ直す点にある。

分担を年代順に述べると、研究分担者の及川は、19世紀後半から1930年代にかけての詩、民衆歌、民俗学の政治的影響力を中心に担当し、研究分担者の清水は散文、小説というジャンルにおいて、フィニアン運動、ゲール同盟、脱英国化運動、アイリッシュ・アイルランド運動、復活祭蜂起といったコンテクストにおいて考察した。研究代表者の三神は、20世紀の演劇というジャンルで、1916年の

復活祭蜂起がどのように<記憶>され<再考・再評価>されてきたかという問題を担当した。

及川は、主にアイルランド特有のロマン主義と民俗学の発展に関して、ジェームズ・クラレンス・マンガン、サミュエル・ファークソン、トマス・デイヴィス、レイディ・ワイルド(スペランザ)らによる愛国詩、ジョージ・ピーとリーやユージン・オカレーの民俗学研究という視点で考察、分析し、さらに、ワイルド、イエイツといった作家を中心に、19世紀末から20世紀初頭のアイルランドの文学運動と民族運動を通して、アングロ・アイリッシュのアイデンティティ形成という問題を中心に考察し、イエイツの復活祭蜂起、独立戦争、アイルランド自由国へのスタンスを検討することを目的とした。

清水は、ジョイス研究者としての基盤を活かし、ジョイス以降のアイルランド作家、フラン・オブライエン、ジョン・バンヴィル、ロディ・ドイルらを取り上げ、それらの作家の歴史意識と、ジョイスの影響を明らかにすることを目的とした。

三神は演劇を担当し、復活祭蜂起を<演劇的>事件として捉えようとするメタファーの意味について考察した上で、異なった時代に書かれた、復活祭蜂起をめぐる4つの作品—ショーン・オケイシーの『鋤と星』(1926)、デニス・ジョンストンの『鎌と日没』(1958)、ユージン・マッケイブの『騎手を引きずり下ろせ』(1966)、トム・マーフィーの『パトリオット・ゲーム』(1991)—を取り上げ、分析検討を行い、さまざまな時代に書かれた4つの作品を並列させることによって、1916年から1990年代までのアイルランド社会の変遷をたどることを目的とした。また、直接復活祭蜂起を扱ってはいないが、1916年4月のアメリカ西部に舞台が設定されたセバスチャン・パリーの『白人女通り』(1992)と『パトリオット・ゲーム』を並べることで、復活祭蜂起75周年にあたる1991年当時のアイルランド社会を分析することを目指した。

3. 研究の方法

研究代表者、分担者ともに、取り扱う作家・作品のテキストの詳細な分析をその出発点とした。そうしたテキスト分析に加え、研究代表者の三神はアイルランドの国立劇場であるアビー・シアターのアーカイブ資料にあたり、『パトリオット・ゲーム』上演の記録映像、新聞・雑誌の劇評なども参照した。研究分担者の及川は、*The Nation*、*Irish Penny Journal*、*Dublin University Review*などの当時の雑誌を資料とし、ダブリンにあるアイルランド国立図書館、UCDの大学図書館の資料を参照した。

さらに、3~4ヶ月毎に研究会を開くことで、互いの研究成果について報告し合い、その進捗状況を共有した。

4. 研究成果

本課題の研究成果として、8 件の学術論文と 6 件の学会発表があげられる。さらに、最終年度において、国際シンポジウム “The Age of Centenaries: A Century of Irish History and Literature” を企画し、研究代表者、分担者の 3 名に加え、University College Dublin (UCD) の Anne Fogarty 教授、*The Irish Times* のジャーナリストで、プリンストン大学招聘講師でもある Fintan O’Toole 氏をパネリストとして招聘し、活発な討議が行われた。このシンポジウムのプロシーディングは、*Japanese Journal of European Studies* (vol.3) の特集記事の一つとして出版された。

以上のようなアカデミックな活動に加え、平成 26 年度には早稲田大学エクステンションセンターにおけるオープンカレッジで、「アイルランドを独立に導いた人々」と題し、学外の聴衆に対してリレー形式の連続講義を行った。

研究代表者の三神は、復活祭蜂起という歴史的出来事に対するアイルランド社会の評価の変遷をまず確認し、蜂起が国家の礎として神話化され、指導者たちは英雄とみなされた時代（1966 年 50 周年記念行事はそうした神話化のプロセスにおける象徴的なできごとである）から、1969 年の北アイルランド紛争勃発以降 1990 年代後半、北アイルランド紛争の解決の糸口が見えるようになるまで、蜂起そのものが否定的に受け止められた時代（蜂起の肯定は、IRA の肯定につながると考えられた）の変化と、4 つの演劇作品、『鋤と星』（1926）、『鎌と日没』（1958）、『騎手を引きずり下ろせ』（1966）、『パトリオット・ゲーム』（1991）がどのように反映されているかについて考察した。作家たちは社会の風潮に流されることなく、それぞれの時代で独自のスタンスを示しながら、復活祭蜂起を劇化している。アイルランド社会が復活祭蜂起を神話化しようとするプロセスの中で、『鋤と星』は、逆に蜂起を批判的にとらえ、その焦点は混乱に巻き込まれた一般市民にあるのに対し、その 30 年余り後に描かれた『鎌と日没』は、復活祭蜂起の 1 週間に何が起こったかを描きながら、もう一度、蜂起の意味を再評価しようとした作品であると言える。『騎手を引きずり下ろせ』は、1916 年の蜂起の 50 周年記念行事の一環として 1966 年に上演された作品であるが、社会の熱狂にまきこまれることなく、蜂起の二人の指導者パトリック・ピアスとジェームズ・コノリーの対話を通し、二人の葛藤を描いている。最後に、『パトリオット・ゲーム』を、復活祭蜂起という歴史的出来事を、現代的視点でタブー扱いした 1991 年という（75 周年の）文脈におくことで、マーフィーの作品中凡庸なものであると評価を受けることの多かった同作品を、冷静に相対化を試みているものとして位置づけ、改めて評価することが可能となった。また、1992 年に初演された『白人女通り』は、復活

祭蜂起を直接テーマとして扱ってはいないが、「1916 年 4 月」という時代を設定し、アイルランドからアメリカに渡った人物を主人公に据えてアメリカ西部を描くことで、閉塞的なアイルランド国内での復活祭蜂起に対する議論を、世界的な広がりの中でとらえようとする作品であるとした。〔雑誌論文、学会発表〕

研究分担者の及川は、19 世紀初頭から 20 世紀初頭のアイルランドの歴史と文学の関連をテーマとした。ヤング・アイルランドの機関誌 *The Nation* でトマス・デイヴィス亡きあと健筆を揮ったジェイン・フランセスカ・エルジー（スペランザ）後のレイディ・ワイルドの詩を中心に分析し、彼女の時代性を明らかにした。〔雑誌論文〕また、*The Nation* が得意とした愛国的な伝承歌を現代の聴衆に広めるのに大きく貢献したグループ、プランクシティと、彼らの後世に残した大きな影響を考察した。〔雑誌論文〕また、サミュエル・ファーガソンを扱った論文では、若き日のファーガソンとジョージ・ピートリー、ユージン・オカレー、ジョン・オドノヴァンら陸地測量局の少壮の民俗学者、考古学者との交流を調査し、ファーガソンの詩の発展を跡付けた。〔雑誌論文〕さらに、ファーガソンと初期の W. B. イェイツの関係を中心に検討し、イェイツへのファーガソンの生涯にわたる影響について論じた。〔雑誌論文〕また、トマス・ムーアを通じて伝承歌、伝承音楽とロマン主義的な民族意識について考察した。〔学会発表〕最後に第一次世界大戦、復活祭蜂起、独立戦争、アイルランド自由国成立の激動の時代に、イェイツ、ジョイスらの文学がどのように変貌していったかを概観した。〔雑誌論文〕〔学会発表〕

研究分担者の清水は、20 世紀の歴史と文学の交錯を研究した。復活祭蜂起から自由国成立以後の詩の主題の変遷に、アイルランドのナショナル・アイデンティティの変化を跡付けた。〔雑誌論文〕〔研究発表〕さらにフラン・オブライエンをジョイス文学の後継者として位置づけ、〔雑誌論文〕また、復活祭蜂起を扱ったロディ・ドイルの『ヘンリーと呼ばれるスター』（1999）を検討、分析し、リヴィンヨニズムの観点から復活祭蜂起を再検討することの意味について考察した。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 8 件）

Oikawa Kazuo, Anne Fogarty, Fintan O’Toole, Shigeo Shimizu, Hiroko Mikami. ‘The Age of Centenaries: A Century of Irish History & Literature’ (Waseda University, International Symposium), *Japanese Journal of European Studies*. No. 3. 2015.3. pp. 76-99.

Mikami, Hiroko. Commenting the 1916 Rising: Tom Murphy's The Patriot Game and Sebastian Barry's White Woman Street. Japanese Journal of European Studies. No. 3. 2015.3. pp.100-111.

及川和夫「W・B・イエイツとサミュエル・ファーガソン—二つのファーガソン論を中心に」『学術研究』第 63 号(早稲田大学教育・総合科学学術院、2015 年 2 月) pp.189-201.

清水重夫「アイルランド文学と私」『英文学研究』支部統合号 No.7. 2015. pp.47-51.

及川和夫「サミュエル・ファーガソンとアイルランド民俗学」『早稲田大学大学院教育研究科紀要』No.24(早稲田大学大学院教育学研究科、2014 年 3 月), pp.19-34.

清水重夫「フラン・オブライエン：ジョイス文学の後継者—モダニズムの展開と挫折—」『アイルランド文学 その伝統と遺産』2014. 448-467.

及川和夫「若き女流愛国詩人の肖像—ジェイン・フランセスカ・ワイルド(スペランザ)の詩」『早稲田大学大学院教育研究科紀要』No.23(早稲田大学大学院教育学研究科、2013 年 3 月) pp.1-14.

及川和夫「ブランクシティから見たアイルランド音楽の 50 年—音楽社会学的考察」『学術研究』第 61 号(早稲田大学教育・総合科学学術院、2013 年 2 月) pp.207-22.

[学会発表](計 6 件)

及川和夫「トマス・ムーアとアイルランド・ロマン主義」イギリス・ロマン派学会第 40 回全国大会. 2014.10.18. 於茨城大学.

Oikawa, Kazuo. 'General Introduction'. Waseda University: International Symposium. 2014.10.10. 於早稲田大学.

Shimizu, Shigeo. 'Searching for Irish Identity: Irish Poetry for the Past 100 Years'. Waseda University: International Symposium. 2014.10.10. 於早稲田大学.

Mikami, Hiroko. 1916 in 1991: 75th Anniversary of the Rising and Tom Murphy's The Patriot Game. Waseda University: International Symposium. 2014.10.10. 於早稲田大学.

Mikami, Hiroko. On 'White Woman Street'

(1992): Sebastian Barry's American West. International Association for the Study of Irish Literatures. 於京都ノートルダム女子大学. 2013.10.12.

及川和夫「英詩への誘い—民間伝承とロマン派」『イギリス・ロマン派講座』(イギリス・ロマン派学会、2013 年 6 月)

[その他]

早稲田大学オープンカレッジ春学期科目「アイルランドを独立に導いた人々」於早稲田大学エクステンションセンター2014年4月～6月

清水重夫「ダニエル・オコンネルとカトリック解放運動」2014.5.10

及川和夫「ヤング・アイランダーズの政治・文学活動」2014.5.17

清水重夫「パネルの自治運動・土地法改正の活躍と挫折」2014.5.24

三神弘子「復活祭蜂起と独立運動」2014.5.31

及川和夫「独立運動と音楽」2014.6.7

三神弘子「独立運動と演劇」2014.6.14

6. 研究組織

(1)研究代表者

三神弘子 (MIKAMI HIROKO)
早稲田大学・国際教養学術院・教授
研究者番号：20181860

(2)研究分担者

及川和夫 (OIKAWA KAZUO)
早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授
研究者番号：50194056

清水重夫 (SHIMIZU SHIGEO)
早稲田大学・法学学術院・名誉教授
研究者番号：00130873